

07・クラウディアはわたしの、

『06・指も、おっぱいも舐められて、貝合わせする』から約五年後。

ある年の七月。白鹿女学院の学院祭。

クラウディア、すっかり大人になつていて。

今日は二人で学院祭に来ている。そろそろ帰る時間なのだが、若干早い。時間つぶしにガーデンテラスにいる。

主人公は今、飲み物を買いに行つていて。クラウディアは席取りを任せられた。

クラウディア、通りすがる生徒たちを見ながら、この学校に通つていたころの事を思い出している。

……と、主人公が戻ってきた。

SE1 .. 外の環境音

【頭から最後まで流す】

【トラック終わりまでごく小さな音で流し続ける】

【0~5秒ほどまで流して**SE2**】

S E 2 .. 主人公の足音

【頭から流す】

【0ー6秒ほどまで流してセリフ】

● 中央 少し遠い

「先生。こっちです」

クラウディア、主人公を見つけて手を振る。
さらに、ちょっとした遊びがしたくなる。

「わざと暗い雰囲気で。聞いている側に『えつ!? 二人は別れちやつたの!』と誤解させ
る」

「お久しぶりですね。いつ以来でしようか」

〈主人公〉

「……とはいっても。

ジユースを買つてくるまでの四、五分ほどだけだけだけね？ 離れてたの！
デイデイつてば、さつきからどうしたの。今日何回目だい？ このやりとり。

新作はそういう方向性なの？『数年ぶりに会って再燃する元教師と教え子の愛』的な？
わたしは書かないタイプの台本だよ！』

●中央

「【普段のテンションに戻る】

あはは♥ ちょっとやつてみかつたんです。

『母校の学院祭に来た、元教師とOG』とか。

いかにも『数年ぶりの再会』ってシチュエーションじゃありませんか。

実際に離れ離れだつたのは数分ですけど。

飲み物ありがとうございます、いただきます♥』

〈主人公〉

「数年ぶりなんてとても耐えられません！

わかってるでしょ？ わたしは暇さえあればいちやいちやしたい人なの。

わたしというキャラクターの解釈を根本から誤っています。

遠恋ものは嗜好じやありません。よしてください！』

●中央

「ふふ。私もです♥

あれだけ苦労して両想いになれたんですから、もう絶対離れたくないです」

〈主人公〉

「苦労！ まつたくだ！ もう二度と学生寮の壁によじ登るなんてしたくないね。
まあ、あれはわたしがデイデイに会いたいからそうしたんだけど！」

●中央

「あはは♥ それを言うなら、最終的に寒さとの戦いになつた地下書庫での夜明かしも、
その苦労リストに加えて下さい。」

【少し間をあけてから】

……そうだ。苦労したといえば。

来週からプール開きみたいですよ。

【少し間をあけてから】

でも、今年から選択授業になつたらしくて。

卓球と選べるらしいです。

変わつていくんですね。

私みたいな子がいなくなるんだと思うと、ホツとします」

〈主人公〉

「……そうだね」

主人公、その話を聞いて『ついに通ったか！』と安堵する。

プールの件に関しては、実は自分も、退職前に色々意見したのである。だが、これはさすがにクラウディアには秘密である。格好つけたい。

クラウディアの事なので、わたしのやる事なんて、全部まるつとお見通しかもしれないけど……。

ところで、プールと言えば。

〈主人公〉

「ところで、今更だけど言つてもいい？」

●中央

〔何を言われるのか全く予想がついていない〕

「はい。プールが何か？」

〈主人公〉

「プールに落ちた日。あの流れでセツクスしなかつたの絶対おかしい」

クラウディア、主人公が急におかしな事を言うので、思わず笑ってしまう。
だが、確かにそうだ。しかしあの時はそんな発想すらなかつた。

純愛していたのである。今では見る影もないが……。

●中央

「あはは！ 私もそう思います♥

プールであんな事になつたのに、私たち健全過ぎでしたね。

〔少し間をあけてから〕

あの日の事、日記が残つてるので、今でも読み返すんですけど。
なんだかとつても昔の事のように思えます。

〔少し間をあけてから〕

あの時はこんな風になれるなんて思つてもみませんでした。

〔少し間をあけてから〕

あの頃の私は、自分に自信がなくて。

先生の事を好きな人、全員を敵視して、嫉妬して。

そのうち私は、先生じやないものをみんな嫌いになる。

どんどん嫌な人間になつて、そんな自分に耐えられなくなつて、最後には自滅するんだ
ろうと思つてました

〈主人公〉

「えっ!? そうだつたの!?

わたしの中では、デイデイはずつといい子だつたよ。

わたしのあれそれを許してくれた時なんか、本当に天使だと思つたよ!」

●中央

〔内心『知らなかつたんかい。さすが先生』と思つている〕

そうですよ? 必死にいい子ぶつていただけで、ものすごく邪悪だつたんです。

〔少し間をあけてから〕

でも、先生、優しいから。

いつも大事にしてくれるから。

私、何も嫌わなくてよくなつちやつた。

いつの間にか、自分の事まで許せるようになつちやつたんです。

【少し間をあけてから】

だからもし、私をいい子だと言つて下さるなら、それは先生がいるからです。

【『いや、確実にいい子ではないな』と気づく】

というかやつぱり全然いい子じやないです。
いい子は学校あんな事しません。ふふふ♥』

クラウディア、明るく笑う。

主人公は、それを見て安堵する。

五年前、主人公はクラウディアの卒業を待つて、教師をやめた。

今はまつたく違う仕事をしている。

それは『自分みたいな人が教師をやつているのはどうなのか』という理由からだつたの
だが、これを打ち明けた時だけは、クラウディアと揉めた。

クラウディアとしては辞めてほしくなかつたようなのだが、こればっかりは応えられなかつた。

自分はよい先生ではなかつたし、この先よい先生になれる気もしなかつたからだ。

それならせめて、クラウディアだけの先生になりたいと思つたが、それにすらなれなかつた。

思えば六年前、クラウディアをプールに誘つた日から、自分は先生をやめていた。

その後も学院に残っている方がおかしかったのだ。

だけど、そんな自分をクラウディアは今も変わらず慕ってくれている。

最近、彼女ではなくなったが……。

●中央

「大好きです。

先生は私に自由をくれました。

人の目を気にして怯えて。

いつも隅に隠れていた私は、あなたのおかげで、こんなに変わることができました。

今は、なんだってできる気がします……特に、先生のためならね♥』

◇主人公

「デイデイ……」

●中央

「あ。そろそろ時間ですね。行きましょうか」

◇主人公

「あ!? うう……。ねえ、本当にバス乗るのー?」

●中央

「『今更何を言う?』という感じで」

ええ、そうですよ? 他に交通手段ありませんし」

〈主人公〉

「何とかしてこの未来を回避できないの?」

●中央

「恨むならこの田舎の女子校を恨んで下さい。

先生にはこれから、六年前先生を恐怖のどん底に陥れた呪いのバスに乗つていただきます」

しかし、最近彼女をやめたクラウディアは、主人公に手厳しい。
今も、有無を言わせない雰囲気がある。

主人公は、クラウディアが自分と交際するようになつて、本当に明るくなつたと思う。
明るくなつただけじゃなくて、自分の意見をはつきり言えるようになつたようだし、意

に沿わない事をさせられて、困っている姿を見る事もなくなつた。

自分は、教師としては本当にダメだつた。

だが、クラウディアの『…………』としては、今も割といい仕事ができるんじやないかな、と思う。

（主人公）

「やだー！あのバス、トラウマなんだよー！
ねえ！またあの人気が乗つてたらどうする？
わたし今度こそ泣くよ！泣いちゃうよ！」

一方、クラウディアは、ごねる主人公にちよつと驚いている。

なんだこれ。今日に限つて、随分食い下がるな。
ていうかこの人、そもそもここまでバスで来たの忘れたの？と思う。

しかしその次の瞬間、あ。これわたしから甘い言葉引き出したいやつだ。
いわゆるいつもの茶番だ。と気づく。先生は『言わせたいタイプ』だから……。
なので、それに応える事にする。……これから言う事は、もちろん本心だし。

●中央

【上機嫌で】

ふふ。何が来たつてご安心下さい。

これから先、何が現れようと。先生は私が守ります。

【少し間をあけてから】

だつて私は、先生のお嫁さんなんですから♥

……ね♥

S E 3 ..主人公とクラウディアが椅子から立ち上がる音

【頭から流す】

【0—2秒ほどまで流して S E 4。このあとの『キュイツ』という嫌な音が入らないようにする】

S E 4 ..主人公とクラウディアが椅子をとの位置に戻す音

【頭から最後まで流す】

S E 5 ..主人公とクラウディアが歩き出す音

〔**S E 2**と同じ音〕

〔途中から流す〕

〔8—15秒ほどまで流してフェードアウト〕

このままフェードアウトして終了。